

■ 解答・解説

問1 和歌が生まれるもとになる「人の心」を植物の「種」にたとえ、そこから生い育って表に現れた「言葉 (=和歌)」を、種から茂る「葉 (言の葉)」にたとえている。心を種、言葉を葉とする比喻によって、和歌が人の心から自然に生まれ出るものであることを表している。

問2 (訳) さまざまな (種々の) 言葉になったのである。

※「よろづ」=数多くの・さまざまな。「言の葉」=言葉 (ここでは和歌)。「なれりける」=なったのだ、の意。

問3

(1) 係助詞 (強意の係助詞「ぞ」)。

(2) 係り結び (係り結びの法則)。係助詞「ぞ」を受けて、文末が連体形「ける」で結ばれている。

(3) 「なれ」=う行四段活用動詞「なる」の已然形 / 「り」=完了 (存続) の助動詞「り」の連用形 / 「ける」=過去 (詠嘆) の助動詞「けり」の連体形。

※完了の助動詞「り」は、サ変動詞の未然形・四段動詞の已然形に接続する (「さみしい」の語呂で覚える)。よって四段動詞「なる」の已然形「なれ」に「り」が付く。文末が終止形「けり」ではなく連体形「ける」になっているのは、係助詞「ぞ」を受けた係り結びによる。

問4 (訳) この世に生きている人は、関わる事柄 (=出来事) が多いものであるから。

問5 イ。ここでの「ことわざ」は、現代語の「諺 (ことわざ)」ではなく、「事+業 (わざ)」で、さまざまな出来事・事柄・なすべきことの意。

問6 接続している活用形=已然形 (「なれ」は断定の助動詞「なり」の已然形)。意味=順接の確定条件 (～なので・～だから)。已然形+「ば」で原因・理由を表す。

問7 (訳) 心に思うことを、見るもの聞くものに託して (ことよせて) 言葉に表しているのである。

問8 イ。鶯や蛙は、人間以外の生き物も鳴き声によって歌を詠むのだ、という主張を支える具体例として挙げられている。

問9 (訳) どれ (=どの生き物) が歌を詠まないことがあろうか (いや、すべて歌を詠むのだ)。

問10

(1) 反語 (反語表現)。係助詞「か」を用い、文末が連体形「ける」で結ばれる係り結びでもある。

(2) 生きているものはすべて (みな) 歌を詠むのだ、ということ。

(3) 基本形=「ず」。意味=打消 (～ない)。「ざり」は打消の助動詞「ず」の連用形 (ざら・ざり・○・ざる・ざれ・ざれ)。

問11 (訳) 生きているものすべて (あらゆる生き物)。

「し」=強意の副助詞。「生きとし生けるもの」で、生きとし生けるものを強調し「ことごとく・残らず」という気持ちを添える。

問12 (訳) (歌は) 力を入れることもしないで (自然に) 天地 (の神々) を動かす。

※ 「ずして」 = ~しないで。和歌が力づくでなく天地を感動させる、という意。

問13 (和歌の四つのはたらき)

- ・ 力を入れずに天地 (自然・神々) を動かす。
 - ・ 目に見えぬ鬼神をも、しみじみと感動させる。
 - ・ 男女の仲をも和らげる (親しくさせる)。
 - ・ 勇猛な武士の心をも慰める (和ませる)。
-

問14 ウ。古文の「あはれ」は、しみじみと心を動かされる・趣深く感じる、の意。「鬼神をもあはれと思はせ」 = 目に見えぬ霊的な存在さえも、しみじみと感じ入らせる、ということ。

問15 (訳) 勇猛な武士の心をも和ませる (慰める) のは歌である。

問16 人は心の中に思ったこと (感動) を、目に見えるものや耳に聞こえるものに託して、言葉 (=和歌) として表現する。つまり和歌は、心に生じた思いがことばとなって外に現れたものだ、と述べている。

問17 (例) 和歌は人の心から生まれ出た言葉だということ。(人の心を種とし、言葉となって現れたもの。)
(25字以内で、心=種・和歌=言の葉という比喻を入れて答える。)

問18

(1) 天皇 (醍醐天皇) の命令によって編まれた、勅撰和歌集。「勅撰 (ちよくせん)」の語を用いる。『古今和歌集』は最初の勅撰和歌集である。

(2) 紀貫之 (きのつらゆき)。

(3) 平安時代 (平安時代前期、十世紀初め・九〇五年成立)。

問19 真名序 (まなじょ)。漢文で書かれた序で、紀淑望 (きのよしもち) が書いたとされる。仮名で書かれた「仮名序」と対になる。

問20 イ。仮名序は、和歌を人の心の自然な表れにとらえ、天地・鬼神・人の心をも動かす力をもつものとして高く評価している。

問21 (例) 仮名序は、和歌の本質と効用を初めて体系的に論じた、日本最古の本格的な歌論であり、後世の和歌観に大きな影響を与えたから。
